

伝統文化の継承における地域知に関する考察

出水 海里¹・田中 尚人²

¹学生会員 熊本大学 工学部社会環境工学科 (〒860-8555 熊本市中央区黒髪2-39-1)

E-mail: kairi2102@outlook.jp

²正会員 熊本大学准教授 熊本創生推進機構 (〒860-8555 熊本市中央区黒髪2-39-1)

E-mail: naotot@kumamoto-u.ac.jp

自然との繋がりが希薄化する現代において、地域で伝統的に育まれてきた知に根ざし、豊かな生活環境を管理することは重要な課題の一つである。この課題に対して地域知を、幅広い人々に継承することが挙げられる。そこで、伝統文化継承における地域知を明らかにすることを本研究の目的とした。研究対象地である宇城市を五つの地域特性に分けてそれぞれの伝統文化を考察したところ、地域特性に対応するべく文化が発展していったことが明らかになった。インタビュー調査より、継承者は伝統文化を通じて地域知を獲得していた。また、伝統文化を地域振興に活用する過程で新たな知を構築していた。地域知とは地域コミュニティに付帯し、共有されて、さらに更新されていくものであると明らかになった。

Key Words : local knowledge, indigenous knowledge Inheritance, traditional culture

1. はじめに

自然との繋がりが希薄化する現代において、地域で伝統的に育まれてきた知に根ざし、豊かな生活環境を管理することは重要な課題の一つである。

この「地域で伝統的に育まれてきた知」は一般的に地域知、在来知、伝統知、伝承知などと呼ばれている(以下、地域知と記す)。UNESCOによると地域知は持続可能な開発を行うための基盤になる¹⁾とされている。先行研究においても、地域知は防災²⁾や教育³⁾、地域コミュニティの強化⁴⁾等、まちづくりにおいて重要な役割を果たすことが示されている。

しかし、近代化と共に地域知は失われつつある⁵⁾。この地域知の継承の場として、祭礼行事があると考えられている。山下ら⁶⁾は、岡山県山間部にある集落の伝統文化の調査で、祭などの儀礼行事は「地域(環境・施設)認知に資する機能」や「社会の維持に資する機能」があると分析した。現代の祭礼行事の担い手は、一次産業従事者に限らず様々な職業⁷⁾や幅広い年齢層⁸⁾の者である。したがって、祭礼行事は、地域知を地域の多様な人に継承する場としての役割が期待されている。

そこで本研究の目的を、伝統文化の継承における地域知を明らかにすることとする。

研究対象地は熊本県宇城市である。総面積188.6 km²⁹⁾、人口57,032人¹⁰⁾、一次産業が盛んである¹¹⁾といった普遍的な地方都市である。宇城市を対象に、持続可能なまちづくりの観点から地域知を明らかにした研究は少ない。ここに本研究の新規性がある。研究の構成は図-1の通りである。2章では、宇城市

の地域特性を明らかにした。3章では、宇城市で継承されている祭礼行事について調査し、その結果を述べた。4章では、2章、3章の調査結果から地域知を分析した。5章では、各章のまとめと本研究の結論を述べた。

2. 宇城市の地域特性

本章では、研究対象地である宇城市の自然環境や産業、土地利用について調査し、宇城市の地域特性について分析した。

(1) 宇城市の自然環境

宇城市の自然環境は、西部、中央部、東部と大きく三つに分けることができる。宇城市の起伏と水系を図-2に示す。

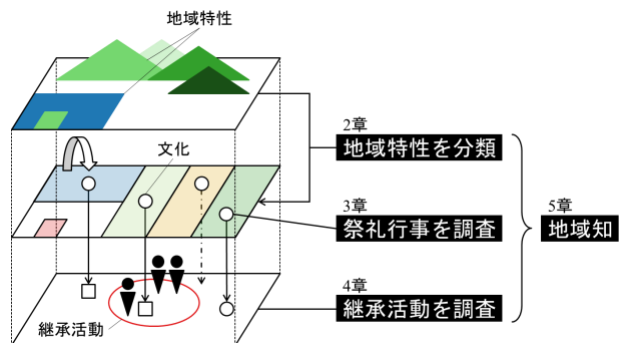


図-1 研究の構成

西部は山岳傾斜地であり、三角町と不知火町が該当する。またここは、島や半島と行った性質を持っていて、比較的気温が高く雨が少ない気候である。一級河川と二級河川は共になく、小河川が谷に沿って流れている。

中央部は大きな平野であり、その殆どは干拓によって造成された。不知火町の一部、松橋町の西部、小川町の西部が中央部に該当する。西部と年平均気温は変わらないが、年平均降水量がやや大きい。一級河川はないが、二級河川の大野川、五丁川、砂川が水系を成して田を潤している。

東部は山間部となっており、松橋町の一部、豊野町、小川町の東部が該当する。西部や中央部と比較して気温は低いが、降水量は平野部と変わらない。一級河川と二級河川は共になく、小河川が谷を流れている。

(2) 宇城市の土地利用と産業

図-3に宇城市の土地利用図の変遷を示す。

西部には森林とその他農用地が大きく広がっている。ここでは、傾斜や温暖な気候を活かした柑橘類などの栽培が盛んである。40年間の変化として、田と森林の面積が減少し、その他の農用地が増加した。

中央部には田が広がっていることが特徴的であり、稲作が盛んである。40年間で建設用地が大きく拡大し、市街地として発展したことが分かる。

東部に関しては、人々の生活圏が山に囲まれていることが読み取れる。40年間の変化として、田の一部がその他農用地に転用されて、また建設用地が拡大したところもあった。

(3) 小括

宇城市の地域特性は図-4の通り、島、傾斜地、平野部、中山間地、山間部に大きく分けられる。

年平均気温、年平均降水量は松橋気象台で観測が行われていた1926年から1960年の気候データ¹⁵⁾から推測した。また、産業は農林水産省: 2020年農業センサス¹⁶⁾、平成30年海面漁業生産統計調査¹⁷⁾、宇城市要覧2018¹⁸⁾を参考にして記入した。

この5つの地域特性は、自然環境や土地利用、産業でそれぞれ異なっているが、これらの境界線は旧五町の境界線と一致しない。したがって、宇城市を旧

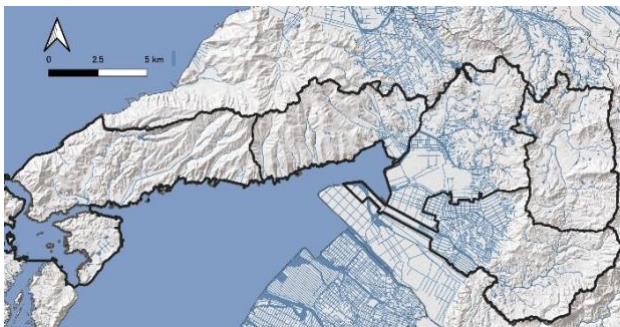
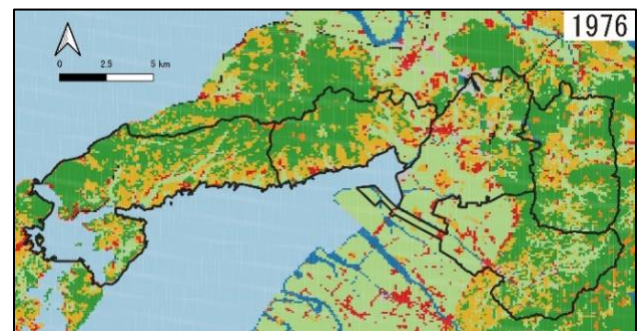
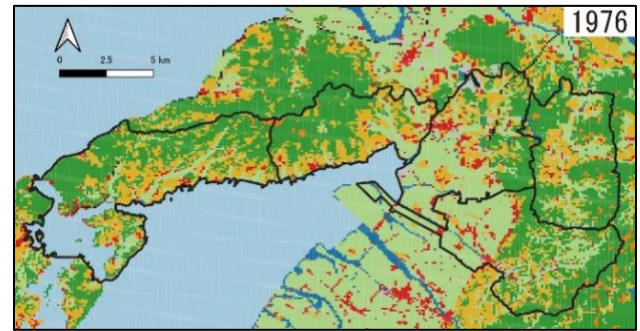


図-2 宇城市の陰影と水系

(地理院タイル(陰影起伏図)¹²⁾に基盤地図情報による水系と水涯線を重ねて作成)

五町で区別するよりも、自然環境や産業による差で比較することが適切である。

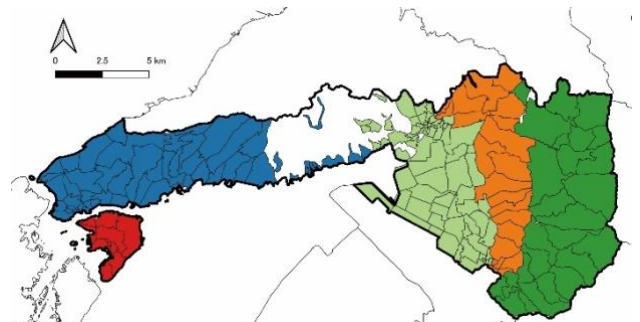


凡例:

田	海水域
その他農用地	荒地
森林	建設用地
河川地、湖沼	幹線交通用地
海浜	その他の用地

図-3 土地利用の変遷

(国土交通省による国土数値情報(昭和51年,平成9年,平成28年の土地利用細分メッシュデータ)¹⁴⁾を加工して作成した)



色	島	傾斜地	平野部	中山間地	山間部
位置	戸馳島	宇土半島南部	不知火町東部、松橋町南部と西部、小川町西部	松橋町北東部、松橋町東部、小川町中央部	松橋町北東部、小川町東部、豊野町全域
年平均気温	17℃前後	17℃前後	16℃~17℃	15℃~17℃	15℃~16℃
年平均降水量	1700mm~1800mm	1700mm~1800mm	1800mm~2000mm	1800mm~2000mm	1800mm~2000mm
地形・地質	島。一周を海で囲まれている。	半島であり、地域内はほぼ全域が山岳傾斜地帯である。南部は不知火海に面している。	干拓によって造成された平野が大きく含む。西部に不知火海に面している。	松橋町北東部では小さな起伏に富んだ地域。それ以外は山間部と干拓地の両方	山脈に沿う九州自動車道より東側の地域であり、豊野町においては盆地を含
主要な産業	農業: マンゴー、胡蝶蘭等 漁業: カキ等	農業: 柑橘類、マンゴー、イチゴ、ブドウ、ナス等	農業: 稲作、トマト、レンコン、胡瓜、ナス等	農業: 稲作、ナス、メロン、チェリーリップ等	農業: 柿、ブドウ、ナン、ショウウガ等

図-4 土地利用の分類

表-1 宇城市の祭で奉納される伝統文化

分類	島	傾斜地	平野部	中山間地	山間部	合計	
神楽	0	1	2	6	3	12	
獅子舞・虎舞	0	0	2	0	1	3	
風流	風流踊り	0	4	5	1	12	
	臼太鼓踊り	2	2	7	2	14	
	棒踊り	0	0	0	0	1	
	薙刀踊り	0	1	0	0	1	
田楽	0	1	5	1	0	7	
歌（唄）	0	0	1	2	1	4	
娯楽・競争	相撲	0	9	1	2	4	16
	流鏝馬・馬追い・馬駆け	0	1	1	2	0	4
	芝居・にわか・演芸	0	6	3	1	2	12
	その他	0	6	6	3	3	18
不明	0	0	0	3	0	3	
合計	2	31	33	23	18	107	

3. 宇城市の伝統文化に関する調査

本章では、宇城市の伝統文化に関する調査の結果を述べた。

(1) 調査手法

伝統文化の調査では以下の文献を用いた。

- ・旧五町の郷土史^{19)~23)}
- ・宇城市の伝承芸能調査事業のデータベース²⁴⁾
- ・公益財団法人熊本県立美術館による伝承芸能調査事業のデータベース²⁵⁾
- ・宇城市伝統文化芸能まつりパンフレット^{26)~37)}
- ・宇城市のホームページ²⁷⁾

その際、本研究の目的に従って、奉納物があり、集落名が明記されている祭礼行事を抽出した。集落の大きさは郷土史、宇城市のオープンデータマップ²⁸⁾における行政区を基準とした。

(2) 調査結果

調査の結果、宇城市の祭で奉納されたことのある107の伝統文化を抽出できた。伝統文化を地域特性別に整理したものを表-1に示す。ここで、伝統文化の分類は市データベースに従いつつ、文献上の全てのデータを記入するため、薙刀踊り、歌（唄）、相撲の項目を追加した。

全ての地域特性で共通して確認された伝統文化は雨乞いだけであった。宇城市における雨乞いの記録を表-2に、分布を図-5に示す。

雨乞いとは、農耕民族が集団で祈祷をする臨時の祭である²⁹⁾。宇城市においては、太鼓や舞、踊りなどの地域に根付く芸能が雨乞いで奉納されていた。これらの芸能は、雨乞い以外に集落の祭や娯楽に用いられることもあった。

(3) 地域特性別の伝統文化の特徴

全ての地域で共通であった雨乞いを用いて、そこで奉納された伝統文化を地域特性別に比較した。

表-2 雨乞いの記録一覧

地域特性	集落名	分類	伝統文化	現在も活動
島	内湯	臼太鼓踊り	童神太鼓	○
	本村	臼太鼓踊り	雨乞い太鼓	○
傾斜地	上本庄	臼太鼓踊り	雨乞い太鼓	○
	下本庄	臼太鼓踊り	雨乞い太鼓	×
	宮崎	薙刀踊り	薙刀踊り	×
	永尾	臼太鼓踊り	雨乞い太鼓	×
	平野部	柏原	臼太鼓踊り	太鼓
	小曾部	臼太鼓踊り	太鼓	×
	塚原	風流踊り	鯨船	×
	松崎	田楽踊り	おろろんべ	×
	島	臼太鼓踊り	銅鑼太鼓	×
	東松崎	臼太鼓踊り	底井樋太鼓踊り	○
	南新田	臼太鼓踊り	長太鼓踊り	×
	久具	歌（唄）	荒山法師	×
	小川本村	臼太鼓踊り	臼太鼓踊り	×
中山間地	内田	不明	花棒	×
	古保山	歌（唄）	子守	×
	竹崎	田楽踊り	味噌搗き	×
	曲野	不明	鯨船	×
	表南小川	臼太鼓踊り	太鼓棒薙刀踊り	○
	北小野	田楽踊り	オロロンペー	×
	萩尾	不明	大蛇	×
山地	舞嶋	棒踊り	棒踊り	○
	上巢林	臼太鼓踊り	太鼓	×
	下糸石	獅子舞・虎舞	虎舞	○

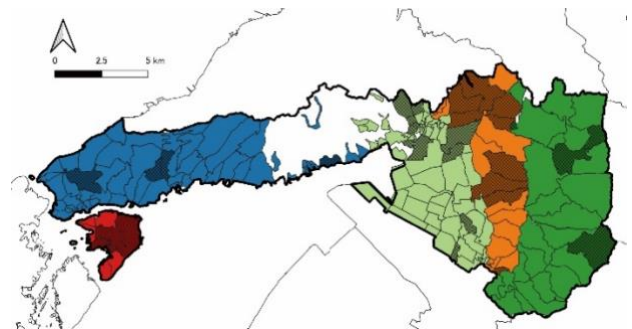


図-5 雨乞いの分布

a) 島の伝統文化

島の雨乞いの特徴は鬼が登場する点である。内湯の鬼の面は、献上米を狙う盗賊を追い払うために領主であった阿蘇氏より譲り受けたという。この鬼の面を参考に、本村区の霊照寺の住職であった密了師は、本村区のために二つの鬼の面を作った。このような経緯で二つの集落は鬼の面を獲得し、雨乞いに用いるようになった。どちらの雨乞いも太鼓を船に乗せて海に浮かべ、叩きながら島を一周したという

話が残っている。

b) 傾斜地の伝統文化

傾斜地の雨乞いは、太鼓を使用したものが一般的だったと考えられる。上本庄はもともと太鼓を持っていたが、他の集落よりもみすばらしかったといい、それに負けじと非常に大きな太鼓が制作された。この記録より、上本庄付近の集落は太鼓を持っていたと推測される。永尾は海に面した集落であり、傾斜に囲まれていて農用地は広くない。このような集落に雨乞い太鼓が残っていた事実は、宇城市に雨乞い文化が広く浸透していたことを裏付けている。

c) 平野部の伝統文化

平野部の雨乞いは、干拓地という地域特性が文化の発生と発展に影響した点で特徴的である。干拓地は海を埋め立てて像際された土地であり、河川や地下水は塩を含むため稲作に適していない。そのため水不足が発生し、雨乞い文化が育ったと考えられる。

松崎のおろろんべは、本来は干拓地造成の際の作業唄であったが、雨乞いに用いられるようになった。東松崎の雨乞い太鼓は底井樋祭りで奉納されている。底井樋とは大野川の底を通る水道管のことである。水不足を解決すべく、庄屋の松田喜七は猫の迫溜め池から水をひく底井樋工事を決意し、嘉永5年（1852年）7月27日に完成させた。その恩恵を忘れないため、現在も底井樋祭りは開催されていて、雨乞い太鼓が奉納されている。

d) 中山間地の伝統文化

中山間地の雨乞いは、平野部と似た要素をもっていた。しかし、平野部とほぼ同じ芸能でありながら、目的が異なるものがあつた。平野部の松崎のおろろんべは、移住者が干拓地造成の際に歌った作業唄であった。一方、中山間地にある古保山の子守と北小野のオロロンべは、子守歌として使用されていた。後に雨乞いやこの事例から、地域特性に対処する過程で、文化の意義が変化したことが明らかになった。

表南小川の雨乞いは、大太鼓に加えて棒踊りや薙刀踊りも奉納されていた。

e) 山間部の伝統文化

山間地の雨乞いは舞鳴の棒踊り、上巢林の太鼓、下糸石の虎舞があつた。舞鳴の棒踊りは幕末頃に薩摩の行商人から伝わったものである。上巢林の太鼓は雷に見立て山の中腹で叩かれていた。山を利用する点で他の地域と異なっている。下糸石の虎舞に関しては、なぜ虎の舞が発生したか明らかになっていない。

(4) 小括

宇城市において雨乞いは図-4で分類した全ての特性で確認された。宇城市において普遍的な文化であったと推測される。また雨乞いに用いられた芸能は、集落の祭や娯楽としても披露されていて、身近なものであつた。

雨乞いに関連した伝統文化を各地域で比較すると、地域特性に対処し、地域特性を利用する中で、伝統文化は発生、発展していったことが明らかになった。

表-3 質問項目

質問I：保存会の属性について	
I-1：継承物	I-5：活動場所
I-2：由来	I-6：活動頻度
I-3：活動人数	I-7：披露の機会の有無
I-4：年齢層	
質問II：保存会活動について	
II-1：代々大切にしている教えや考え方	
II-2：慣習やしきたり	
II-3：この活動を通して子どもたちに伝えられないこと	
II-4：継承活動における変更点	
II-5：次世代に伝えたいこと	

表-4 インタビュー対象者

保存会	日程	対象
A：内湯童神太鼓保存会	2021年12月5日	保存会の立ち上げ関係者3名
B：戸馳本村雨乞い太鼓保存会	2021年12月4日	区長、保存会立ち上げ関係者
C：上本庄雨乞い太鼓保存会	2021年11月25日	保存会会長
D：東松崎底井樋太鼓踊り保存会	2021年12月6日	保存会会長、語り部
E：雨乞い太鼓保存会	2021年12月1日	区長、前区長、保存会会員
F：舞鳴棒踊り保存会	2021年12月9日	保存会会長、保存会会員2名
G：宮川虎舞保存会	2021年12月1日	保存会会長

4. 継承者に対する半構造化インタビュー

本章では、現在も雨乞いを継承する保存会を対象に行った半構造化インタビューについて述べた。

(1) 調査手法

現在まで雨乞い文化の継承活動を行っている7団体を対象に、半構造化インタビューを行った。

地域知の発生には、住民が地域特性を認識し、地域特性に対処し、地域特性を活用するといった過程が必要となる¹⁾。雨乞いは自然環境や産業などの地域特性を背景に成立するものであり、地域知研究の対象として適当であると考えた。

質問項目を表-3に示す。回答は保存会会長や保存会の立ち上げ人など、継承活動に詳しい者に依頼した(表-4)。回答者は合計15人(男性12人、女性3人)で、回答者の平均年齢は70歳(標準偏差4.6)であった。インタビューの際、許可を得てICレコーダーで録音を行い、同時にフィールドノートにメモを取った。

(2) 質問IIに対する回答

a) 由来

回答者は由来として、雨が少ない地域であったこと、川や湧水がないこと、農業従事者がいたことを挙げた。故に、住民は雨乞いが成立した背景である、地域特性について理解していると考えられる。

由来に関連して、保存会EとGの回答者は、昔は農業従事者が多かったが、現在は農用地を貸していて農業従事者は少ないと語った。また、保存会Gの回答者は、継承活動以外の場で地域特性に関する話をする機会はないと語った。

a) 継承物

殆どの保存会で、雨乞いで主として奉納されていた太鼓や舞は、当時と同一のものが継承されていた。新しく作られたものは、一方で、保存会Dに関しては太鼓が残っておらず、太鼓の叩き方や踊りを知る

表-5 保存会活動の概要

保存会	継承物	活動頻度	活動場所	活動人数		年齢層	
				大人	子ども	大人	子ども
A	鐘、太鼓、笛、鬼舞、踊り	披露時のみ活動	太鼓小屋前	5, 6人	0人	20代~70代	-
B	鐘、太鼓、笛、鬼舞、踊り	月に1回	太鼓小屋前	20人程度	0人	50代~70代	-
C	鐘、太鼓、笛、薙刀踊り	披露時のみ活動	太鼓小屋前	24, 5人	0人	40代~60代	-
D	太鼓、踊り	週に1回	公民館	10人	8人	40歳~68歳	3歳~12歳
E	太鼓、笛、薙刀踊り、棒踊り	夏休みに数回	公民館	5人程度	10人程度	70代~80代	4歳~12歳
F	鐘、太鼓、笛、棒踊り	月に1回	公民館	20人程度	0人	46歳~68歳	-
G	虎舞、玉釣り、囃子(鐘、太鼓、笛)	披露の前は集中的に練習	公民館	10人程度	14, 5人	40代~70代	6歳~12歳

者もいなかった。そこで、宇土市の雨乞い太鼓の後継者育成事業に参加して叩き方を学び、自ら新しい曲と踊りを作った。

b) 継承方法

基本的に実践を通して、太鼓の叩き方や舞などが継承されていた。保存会Dに関しては、太鼓の叩き方や踊りを知る者はいなかった。しかし、記念碑や塔本シスコ氏の絵に、太鼓や踊りが奉納される祭の様子が記されていて、それらを参考にして伝統文化を復活させた。保存会D, E, Fでは録音データや録画データに残されていた。

一方で、回答者は、雨乞い成立当時の日常的な行為については深く教わらなかったと語った。全ての保存会で、改めて由来の調査が行われ、その結果を文書に残していた。さらに保存会Aでは演舞に語りを導入し、保存会Dでは紙芝居を作って由来を継承していた。

c) 年齢層

大人の年齢層は保存会Aを除いて高く、40代以上であった。保存会Aに関しては、消防団に20代~30代の若年層がいて、呼びかけると集まりに参加することもあった。保存会C, Fでは「そもそも集落に若年層が少ない」といった声が挙げられた。

子どもの年齢層は、どの会も小学生以下であった。保存会D, Gでは、子どもに継承する際に、親を保存会や地域自治組織に勧誘している。

d) 活動頻度

活動頻度に関しては、定期的な練習日が定められている会(保存会B, D, F)、ある時期に集中して練習している会(EとG)、練習日を定めていない会(AとC)があった。保存会B, C, D, F, Gは年に一度以上の定められた披露の機会(集落の祭や宇城市伝統文化芸能まつり等)があった。総じて、披露の機会の前に活動が盛んになる傾向にあった。

e) 披露の機会

披露の機会として最も挙げられたものは宇城市伝統文化芸能まつりであった。保存会DとGの回答者は、披露の機会がモチベーションの維持に繋がっていると語った。その他、集落の祭や近隣の集落の祭、イベント等で披露されていた。保存会CとDに関しては、昔から太鼓を奉納していた集落の祭があり、年に一度、祭のために太鼓を叩いている。保存会Bに関しては披露の機会として「日の出一番太鼓」を新しく設けた。元旦に集落内の海岸で、初日の出を見に集まった観光客向けに太鼓を披露している。

全ての保存会は市や町のイベントや、テレビ出演などを経験していた。このような披露の機会がある

際は、住民同士で話し合っ出て演ずるかどうかを決めていた。

(3) 質問IIに対する回答

a) 代々大切にしている教えや考え方

保存会A, B, C, Eの回答者は、伝統的な太鼓の叩き方を教わり、同じ叩き方を継承していると述べた。どの保存会も「道楽」や「早楽」(保存会Eでは「まくり」と呼ばれる二種類の叩き方を持っているが、曲は各集落で異なっている。

芸の上達のコツも継承されていた。保存会Eの棒踊りでは「ひょぐんもの(お調子者)は踊りが上手い」、保存会Gの虎舞では「笑いを取ることも大事」と話されていた。

保存会Dの回答者は「底井樋があるおかげで今も農業ができています」と先人に感謝する姿勢を見せた。先人の遺徳を偲ぶことが大切であり、そのための場として伝統文化を復活させたと語った。

保存会Fでは、棒踊りは文殊堂に付属するものであり、文殊堂を守っていくことの方が重要とされていた。文殊堂は舞鳴集落の中央にある神社であり、住民に守り神として親しまれている。

b) 慣習やしきたり

慣習やしきたりが「ある」と答えた保存会は少なく、保存会A, B, Dだけであった。その他の保存会は途中で継承が途切れているため、自分の代まで伝わっていないと述べた。

これに関しては、継承者が途切れたために失われたものと、現在の継承者が認識していないものの両方があると考えられる。

保存会Bでは、太鼓を固定する紐の結び方が定められていたが、似た文化を持つ保存会Aにその決まりはなかった。保存会Aの復活は平成8年と比較的最近であり、慣習やしきたりが消失した可能性が考えられる。

保存会Dでは、他の集落の者に太鼓は叩かせないルールを設けていた。これは保存会に関しても同様であると考えられるが、他の保存会では敢えて挙げられなかった。その他、年功序列を重視した組織の運営や、性別による役割の区別があった。しかし、本人の意向や得意不得意、担い手不足などの理由から、柔軟に変更されていた。

c) 次世代に伝えたいこと

質問II-3, II-5の回答を表-6に整理した。全ての保存会に共通して、「これからも継承して欲しい」という思いが寄せられた。

保存会	1955年					1975年					1998年					2018年	
	江戸	明治	大正	昭和	戦時中	昭和30	昭和50	昭和50	昭和50	昭和50	平成10	平成10	平成10	平成10	平成10	平成30	平成30
A	●?				×					★	×	★	□	△			■
B		●			×		★										■
C			●		×		★					□?	△				
D		●			×								★				□
E	●				×		★									□	
F		●			×				★	×	★		★				
G		●			×			★	■				□?				

凡例：	■ 大人による継承	● 起こり	■ 継承主体の変更 (大人→大人)	□ 子どもに継承
	■ 子どもによる継承	× 中断		△ 子どもへの継承の中断
	? 得られなかったデータ	★ 復活		

図-6 継承主体の変化

保存会Eの回答者の一人は、「子どもたちに太鼓を教えたくて教えているわけではない。ただ自分が太鼓の叩き方を習っていて、頼まれたから教えているだけだ」と消極的な姿勢を見せていた。しかし「太鼓の音がすんならば、太鼓ばしよらすね、と思うことは思う」と語り、継承活動に対して複雑な心境があることを示した。

保存会Dは地域コミュニティの強化に関することを述べている。実際に、保存会C、D、Gは保存会は集落のリーダー的存在となって、祭や集会などの運営主体を担っていた。

f) 継承活動における変更点

最も大きな変化は、継承主体の変化であった(図-6)。保存会D、E、Gでは後継者育成のため、集落の子どもたちに教え始めた。保存会Gでは子ども会と協力し、新たに小虎舞を作って子どもたちに継承させている。保存会Eでは、夏休みに子どもたちに太鼓を教えることが、主な活動内容となっている。保存会Dの回答者は、「子どもの方が披露のときに受けがいいから」と数年前から子どもを主体とした演技に切り替えた。

保存会AとCにおいても、後継者育成のために子どもへの継承を試みた。しかし、保存会Aでは近隣小学校の統廃合によって、保存会Cでは集落の子ども数が減ったため、集落内で子どもと接する機会が消失し、子どもへの継承を断念した。

一方で、保存会BとGは大人が主体となって継承を続けている。保存会Bの回答者は、子どもの頃に太鼓を触ろうとすると長老に叱られたといい、太鼓は子どもが触ってはいけないものであったと語った。保存会Gの回答者は、地域の子どもたちに地域のことを教える活動を行っていたが、棒踊りを教えることは思い浮かばなかったと当時を振り返った。

(4) その他の語り

半構造化インタビューの回答者は、子どもの頃の伝統文化との関わり方が異なっていた。

表-6 次世代に伝えたいこと

保存会	次世代に伝えたいこと
A	・どんな思いで保存会を立ち上げたのか知ってほしい ・雨乞いの由来(地域特性)を伝えていきたい
B	・これからも「本当の打ち方」を伝えていきたい ・太鼓の良さを知ってほしい
C	・昔の人が貧しい中でも苦勞して大きな太鼓を作ったから、今も太鼓を叩けるということ
D	・先人の遺徳 ・生まれ育った村を大事にして欲しい ・「村の人達はみんな仲間だよという絆を培って欲しいな」
E	「せっかく南小川に生まれた子どもならな、南小川にこういうのがあるよっていうのを知ってもらいたい」
F	・「一番守らないかんのは、(略)文殊堂」 ・地域の守り神をこれからも大切にしていってほしい
G	・雨乞いの由来(地域特性)を伝えていきたい ・伝統芸能に触れることの良さ ・江戸時代からずっと継承されてきたことを知ってほしい

保存会BとEの回答者は、子どもの頃に雨乞いを見たことがあったと話した。保存会Bの回答者は「太鼓にずっと関わってきた」と人生を振り返った。

保存会A、D、F、Gの回答者は、伝統文化を見たことはなかったが、家族や地域住民から話を聞いたことがあったと語った。これを通じて、自然観や自然との関わり方について話されていた。

保存会Cの回答者は、大人になるまで雨乞い太鼓の存在を知らなかったと語った。

(5) 小括

半構造化インタビューより、継承活動の実態が明らかになった。継承者は由来の継承を通じて、伝統的な自然観や自然との関わり方を伝えていた。また、継承活動を通して農業従事者の数や少子高齢化の影響などの、集落の業況を把握していた。さらに、今後も継承していきたいものを考え直し、活動に変更を加えていた。

5. 地域知についての考察

本章では、2章、3章、4章の結果を踏まえ伝統文化の継承を通じた地域知を明らかにした。

(1) 地域知についての考察

伝統文化を通じて継承される地域知を図-7に示す。青の矢印が地域知の獲得を示し、赤の矢印が地域知の継承を示している。

2章と3章より、ある文化は地域特性に対処、または地域特性を活用する過程で発生し、発展してきたことが明らかになった。この過程において、自然観や自然との関わり方などの地域知が発生すると考えられる。

しかし、生活様式や価値観の変化などによって、伝統文化の消失が進んだ。4章より、生活様式が完全に改まった際に、歴史性や民俗性などに価値を見出されて、文化が「伝統文化」として復活することが明らかになった。

伝統文化として復活した時点で、集落の世界観は大きく異なっている。したがって、昔と同じ方法で継承することは難しくなっている。

4章より、継承活動を続けるうちに継承者は、地域コミュニティの強化や地域愛着の醸成といった、伝統文化の新たな役割を発見した。それを全うするべく伝統文化継承の形を変えており、地域知も更新されていることが示された。

(2) 地域知の継承についての考察

地域知の継承は主に実践を通して継承されていた。故に継承者が途絶えてしまった場合、地域知が失われる可能性があった。しかし、情報が郷土史や記念碑などに残されていたため、継承者はそれらの情報を参考に地域知を得た。

伝統文化の実践を介さず地域知だけが継承されている場合もあった。祭や伝統文化が途絶えている間、家族や地域住民による伝統文化に関する話から、回答者は地域知を獲得していた。

現在の継承者は言伝に加えて、マルチメディアを活用し、地域知の保存に努めていた。

しかし、継承者本人が地域知を認識していない場合もあった。継承者が当たり前と感じているもの程認識することは難しく、回答として挙がってこなかった。これは先代についても同様で、伝統文化を成立させた世代にとって、水不足を引き起こす自然環境は珍しくなかった。故に雨乞いは必要性のない生活様式として忘れられた上、由来に関する話も特別に残されなかったと考えられる。

6. おわりに

(1) 各章のまとめ

本研究では、祭礼行事を通じて継承される地域知を明らかにすることを試みた。

2章では、伝統文化が誕生した背景となる自然環境と産業に関する調査を行った。その結果、宇城市を五つの地域特性に分けることができた。

3章では、宇城市における伝統文化を調べ、結果を示した。伝統文化は地域特性に対処し、地域特性

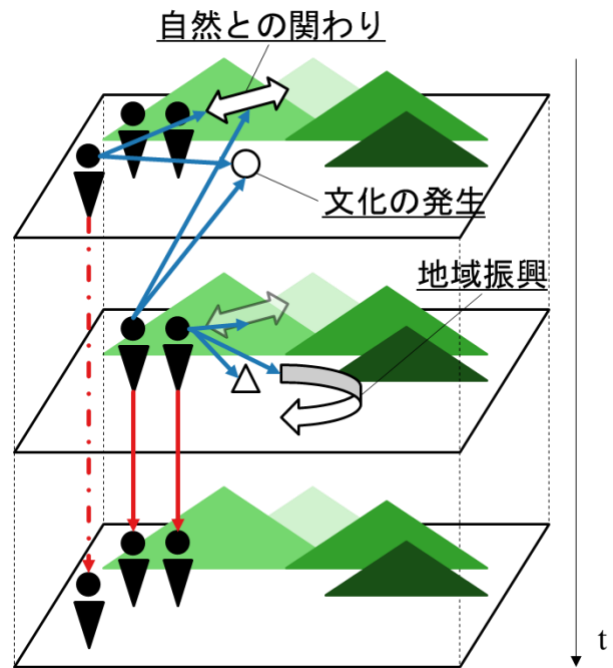


図-7 地域知の継承

を利用する形で発生、発展していったことが明らかになった。

4章では、雨乞い文化の保存会に対して行った、半構造化インタビュー調査の結果を述べた。継承者は伝統文化の継承を通じて伝統的な知を保存し、新たな知も生み出していることが明らかになった。

5章では、2章、3章、4章の結果を基について考察を行った。地域知は地域コミュニティに付帯し、地域コミュニティで共有されて、更新されていると考えられる。

(2) 結論

本研究より、伝統文化の継承を通じて継承される地域知は、

- ・地域特性に対する理解の仕方
- ・地域コミュニティを維持するためのスキル
- ・伝統文化と関わることで発生する哲学

が含まれていることが明らかになった。

これらの地域知は地域コミュニティに付帯し、地域コミュニティで共有されて、更新されていると考えられる。

一方で、地域知は担い手が当たり前のことと感じるほど認識されにくく、失われやすい性質を持っていると推測される。故に、かつて日常の延長線上にあったものを伝統文化として捉え直し、伝統文化に内包される地域知を伝えていくことに意味がある。

(3) 今後の展望

今後の展望として、地域知のまちづくりにおける活用が挙げられる。本研究より、地域知に自然観や自然との関わり方、地域特有の世界観が含まれていたことが明らかとなった。これらは社会基盤の設計や意思決定プロセスに応用できると考えられる。

謝辞：研究を進めるにあたり、保存会をご紹介いただきました宇城市役所文化振興課の伊藤様に、心より感謝申し上げます。そしてインタビューに応じていただきました内湯竜神太鼓保存会、戸馳本村雨乞い太鼓保存会、上本庄雨乞い太鼓保存会、東松崎底井樋太鼓踊り保存会、雨乞い太鼓保存会、舞鳴棒踊り保存会、宮川虎舞保存会の皆様に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) UNESCO: Local and Indigenous Knowledge Systems (LINKS) <https://en.unesco.org/links> (閲覧日：2022年3月4日)
- 2) 山下 裕作, 山本 徳司: 農業水利施設に関連する農村伝承文化の実相と機能, 農業土木学会誌, 71 巻 3 号, 2003. 3.
- 3) 池田 佳和, 十代田 朗, 津々見 崇: 宅地化地域における農耕儀礼コミュニティの変容に関する研究 - 東京都板橋区徳丸・下赤坂地域のケーススタディー -, 都市計画論文集, 40 巻 3 号, pp. 979-984, 2005. 10.
- 4) 井上 果子: 山間地の伝統文化継承に見る新たな農村文化担い手の形 - 高千穂郷・椎葉山地域における神楽継承の事例研究 -, 農村計画学会誌 36 巻論文特集号, pp. 375-382, 2017. 11.
- 5) 佐藤 翔輔, 平川 雄太, 奥村 誠, 今村 文彦: 津波伝承地メディアによる人的被害低減効果の統計的分析 - 東日本大震災で被災した岩手県・宮城県における津波碑と法美由来地名に着目して -, 土木学会論文集 B2(海岸工学), 73 巻 2 号, pp. 1525-1530, 2017.
- 6) 大野 博己, 齊藤 雪彦, 後藤 眞宏, 筒井 義富: 水郷集落における伝統的な生活行為の持つ教育的効果に関する研究, ランドスケープ研究 70 巻 5 号, pp. 677-682, 2007.
- 7) 中嶋 伸恵, 田中 尚人, 秋山 孝正: 水辺空間を基盤とした地域コミュニティの形成に関する研究, 土木学会論文集 D, 64 巻 2 号, pp. 168-178, 2008, 4.
- 8) 地域研究委員会: 「地域知」の蓄積と活用に向けて.
- 9) 宇城市: 宇城市ホームページ, 宇城市の位置と地勢 <https://www.city.uki.kumamoto.jp/q/aview/8/13231.html>
- 10) 総務省統計局: 2020 年国勢調査
- 11) 総務省統計局: 2015 年国勢調査
- 12) 国土交通省: 国土地理院地図 (陰影起伏図)
- 13) 熊本県: くまもとの河川と海岸 2015, 2015, 3.
- 14) 国土交通省: 国土数値情報, 土地利用細分メッシュデータ (昭和 51 年, 平成 28 年) .
- 15) 熊本地方気象台: 熊本県の気候, 熊本地方気象台, 1961. 3.
- 16) 農林水産省: 2020 年農林業センサス
- 17) 農林水産省: 平成 30 年海面漁業生産統計調査
- 18) 宇城市: 宇城市要覧 2018, 2018.
- 19) 三角町: 三角町史, 三角町, 1987. 11.
- 20) 不知火町史編さん委員会, 不知火町: 不知火町史, 不知火町, 1972.
- 21) 林田 憲義: 松橋町史, 松橋町, 1964. 12.
- 22) 小川町史編纂委員会: 小川町史, 小川町役場, 1979. 3.
- 23) 豊野村: 豊野村史, 豊野村, 1991. 3.
- 24) 宇城市: 伝承芸能調査事業データベース, 2021.
- 25) 公益財団法人熊本県立劇場: 伝承芸能調査事業市町村データベース(宇城市)
- 26) 宇城市: 宇城市伝統文化芸能まつりパンフレット (平成 17~20, 22~27, 30, 令和元年度)
- 27) 宇城市: 宇城市ホームページ, 文化財. <https://www.city.uki.kumamoto.jp/q/list/249.html> (閲覧日：2022年3月4日)
- 28) 宇城市: 宇城市オープンデータカタログサイト, 行政区
- 29) 民俗学研究所: 民俗学辞典, 東京堂. 1984. 3.
- 30) 総務省: 1995 年国勢調査
- 31) 「政府統計の総合窓口(e-Stat)」統計 GIS, 2000 年国勢調査「小地域 (町名・字等別)」 (総務省)

A STUDY ON LOCAL KNOWLEDGE IN INHERITANCE OF TRADITIONAL CULTURE

Kairi IZUMI and Naoto TANAKA

In today's world, where the connection with nature is becoming weaker, it is important to inherit the traditional culture rooted in knowledge that has been traditionally nurtured in the region, and to use and manage the sustainable living environment. In general, traditional culture is said to contain local knowledge. In addition, people can participate in traditional events such as festivals regardless of their occupation. Therefore, the purpose of this paper is to clarify the nature of local knowledge in the inheritance of traditional culture. The study area is Uki City, a typical rural city in Japan. Based on historical books, maps, and climatic data, Uki City can be classified into five regional characteristics. Furthermore, traditional culture has been born and developed corresponding to these characteristics. According to the interview survey, it was found that those who preserve traditions place value on historical and folk aspect. They also find the significance of traditional culture as something that nurtures local identity and strengthens the community. They compare and contrast traditional and contemporary meanings, select what they consider necessary, and create new knowledge to protect it. In conclusion, local knowledge is closely connected to the community, shared by the community, and updated by the community.